
 報 告

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 6
P.42- 44 (2018)

フィンランド・ユヴァスキュラ応用科学大学との研究提携について

A Report on the International Research Cooperation with Jyvaskyla University of Applied Sciences

山下 巖¹⁾
YAMASHITA Iwao

Key words : Finland, Jyvaskyla University of Applied Sciences, gerontechnology, robotics,
development of e-learning programme

1. フィンランドの高等教育

本題に入る前に、フィンランドの高等教育の概略を述べておきたい。フィンランドの高等教育は、大学 (Yliopisto: University) と応用科学大学 (Ammattikorkeakoulu: University of Applied Sciences) で行われる。大学では学術研究に力点が置かれ、修士取得が基本単位となっている。これに対し、応用科学大学では職業に直結した実践的・学際的領域を中心に研究が進められる。学士取得が主目標であるが、さらに研究を継続する場合は大学院に進むこともできる。大学は全国に 14 校あり約 16 万 3 千人の学生が在籍しており、応用科学大学は 24 校で約 13 万人が学んでいる。このような高等教育の二元化 (dualism) はヨーロッパの他国においてもみられ、一例をあげるとドイツやスイスの高等教育機関も Universität と Fachhochschule に分化されている。

日本人の価値観からすると大学の方が応用科学大学

よりも上位に位置するような印象を持つが、フィンランドでは小学校の段階から「他人との競争」よりも「自己探求」や「自律学習」に重きをおいた教育方針が徹底されているため、受験生は自分の特徴を活かした将来の目的を達成できそうな進路を選択する。両者の学生間には日本ほどの差別感や対抗意識はない。総人口わずか 550 万で一国を維持してゆくには、国民同士が競い合うのではなくむしろ知恵を出し合って協力してゆかざるをえない。競争相手を国内に求めるのではなく、諸外国と対等或いはそれ以上に涉り合ってゆくため、多彩で多才なグローバル人材育成が肝要どころか国家の行く末をも左右すると言っても過言ではない。外国語教育も、他国に先駆け、いち早く小学校低学年からの義務化を図り、巧みなステップアップ方式を武器に国民の外国語習熟度を世に高めて国際的評価を勝ち得ている。

2. ユヴァスキュラ応用科学大学

さて少々前置きが長くなったが、今回の研究提携を行うこととなったユヴァスキュラ応用科学大学 (Jyväskylän Ammattikorkeakoulu: Jamk) は、首都ヘルシ

1) 順天堂大学保健看護学部

1) *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*
(Nov. 10, 2017 原稿受付) (Jan. 19, 2018 原稿受領)

ンキから車で3時間ほど(約270キロ)北上したユヴァスキュラ市(人口約13万)にある。Jamkには世界70カ国からの留学生1000人を含め約8500人の学生が集い、グローバルな環境下での教育が展開されている。Business, Health & Social Studies, Technologyの3学部・8コースから構成され、各々、フィンランド人を対象にフィンランド語で授業が行われる domestic course と、留学生対象に英語で授業が行われる国際色豊かな international course とが用意されている。言うまでもなく、これら二つのコース間交流は活発に行われており、共通授業も数多くとれるようになっている。

現在ユヴァスキュラ市では、HIPPOS 2020 というスポーツ科学、医学、看護学、社会福祉等を領域横断的に包含した国家規模の大型健康福祉プロジェクトが進

行中で、市の中央病院を取り囲むように体育館、スポーツ・トレーニングセンター、リハビリ施設等をすべて取り込んだ多機能健康センターが建設されつつあり、市全体が活況を呈している。その学術的支柱の役割を果たすのがユヴァスキュラ応用科学大学とユヴァスキュラ大学である。

3. 本学部との共同研究について

本学部とJamkとの共同研究の発端は、去年の海外研修でラハティ応用科学大学(Lamk)にお世話になった際、担当のAnna Romakkaniemi先生からJamkのArmi Hirvonen先生を紹介して貰い、「翌年度の海外研修は是非Jamkで実施して欲しい。」とのお話をArmi先生からいただいたことに遡る。当時すでに、本学国際教養学部がJamkとMOU(Memorandum of Understanding: 提携基本合意書)を交わしていたので、同学部国際交流委員長の島之内教授、実務担当のJoseph Shaules教授から助言を得て、海外研修をJamkで実施する運びとなった。2016年11月にJamkへ出向いて関係の先生方にお会いした際、学術研究推進担当のKare Norvapalo先生から、フィンランド政府による研究助成の“Asia Programme--Japan and Korea”という区分に“Gerontechnology for Nursing”というテーマで順天堂大学保健看護学部との共同研究として応募したいがどうかとの提案をいただいた。帰国後、岡田学



Jamk Dynamo Campus

部長、大熊副学部長にその旨報告し、研究協力に向けての準備が始まった。その後、昨年5月に応募、7月上旬に首尾よく採択の運びに到った。なお、応募に際しては本学部高齢者看護学、公衆衛生看護学の先生方からご助言とご支援をいただいた。

研究の一環として、昨年11月に Kari Vehmaskoski 先生が来学され、看護師養成過程において今後 gerontechnology が果たすべき役割に関する発表を行った。本学部からも、横山前任准教授、阿部講師、榎本助教、佐野助教、酒井准教授が日本におけるロボットの活用事例について英語発表し、その後、活発な意見交換が行われた。この研究会には学部長をはじめ多くの先生方にご参加いただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

今後は、学生のための e-learning programme の開発や教員間の交流等が行われてゆく見通しとなっている。早速、2018年3月の本学部海外研修と時期を同じくして、横山前任准教授と酒井准教授が Jamk を訪問し、assistive technology の開発を手掛ける Respecta 社を視察、その後 E-Geron Project と呼ばれる Optima をプラットフォームとした e-learning プログラム開発の打ち合わせ等に臨むことになっている。また、本年後半には Jamk から数名の先生方が本学部を訪問し、gerontechnology の未来とロボット導入に関する symposium 等を開催することが計画されている。今後も大きな成果が期待される。



Jamk



左から Kari Vehmaskoski, Marjo Palovaara, Kare Norvapalo, Armi Hirvonen の先生方



本学部に Kari Vehmaskoski 先生を迎えて